



## 読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。  
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。  
(編集部より)

### 女性医師の窓

## 子育て中の皆さんへ

石川県立中央病院 糖尿病・内分泌内科 蘇馬 由衣

平成25年3月、富山大学を卒業し、今年度から卒後4年目になります。  
入局もちょうど2年目に突入したといったところの、医師としてまだほやほやの私です。

皆様の想像する女性医師というと、子育て・家事をしながら日中は医師としてバリバリ働くといった感じかもしれませんが、私はまだそこには至らず、いつかはそんな慌ただしい日が来るんだろうな、と思いつつ普通に仕事をしている毎日です。

両親ともに医師の家庭で育っており、よく子育て中の先生方に「小さい頃は親がいなくて兄弟もいなかったら、寂しくなかった?」「どうやって過ごしていたの?」と尋ねられることがあるので、今回は子育て中の医師の皆さんの参考になれば、とおぼろげながら少し幼かった頃の事を思い出して書いてみようと思います。

両親ともに若く、その頃は転勤が多かったこともあり、保育園までは母方の曾祖母、祖母のもとで育ちました。週末に両親が会いに来てくれ、「また来てね」と帰り際の親に言うような、ちょっと切ないシーンがあったようにも思います。小学校にあがってからは両親とともに暮らし始めましたが、両親ともに相変わらず多忙であり、ベビー(?)シッターさんを雇ってもらい、習い事の送り迎えやご飯の用意をしてもらっていました。それでも夜遅くや休日などの時間外の急な呼び出しには、両親にくっついて病院に行き、医局で本を読んだり、ナースさんの休憩所に連れて行ってもらう構ってもらったことも多々ありました。ということで、昔から病院は両親の仕事が終わるのを待つ、落ち着く場所であり、病院嫌いとは無縁でした。

「寂しくなかった?」と言われると…母の電話に病院から電話がかかってきて「くも膜下出血」というワードが出ると(母は脳神経外科医です)、これは病院に行かなきゃいけないパターンだな…と子供ながらに若干暗い気分になっていたもので、少し寂しくはあったんだと思います。ただ、病院と一緒に連れて行ってくれたり、家にシッターさんがいたり、完全に一人なことは少なかったからか、だから自分はそんな家庭にならないように医師になるのをやめよう、と思ったことは一度もないです。むしろ、親が一生懸命仕事をしていることは子供心にもよく分かりましたし、私という面倒をみなければならぬ子供がいる上で、激務をこなしていた親を尊敬しています。

—ということで、今まさに子育て中の女性医師の皆さんと一緒に頑張っている男性医師の方々に知っておいてほしいことは、子供は親が頑張っている姿をよく見ているということです。一時、親が忙しくて寂しい時期があったとしても、皆さんが仕事も育児も一生懸命にやっていることは子供が一番近くで見えています。必ずそれは心に残って良い影響を与えていると思います。

なんてだいたい目線になってしまったようにも思いますが、子育て中の皆さんの参考になれば幸いです。私自身もいつか子育てをする皆さんのお仲間に入った時に恥じないように、一生懸命医療を行っていきたいと思います。